

## 「ブツダの心（大悲）と修行者の心」

室寺義仁

ブツダは悟りを開いた後、パーリ・ニカーヤに伝わる、所謂、梵天勸請説話や、当該説話の『瑜伽師地論』「菩薩地」における解説を参照する限り、瞑想実践中に一切世間の有情／衆生を個々に見定めたとき、悲しみ（*karuṇā*）の極みに至り／悲しみに因り、あらゆる有情が苦しみに<sup>の</sup>が脱れてあれかしとの思願（*cetanā*）を発したと云う。後の仏教徒たちによって、「大悲」（*mahākaruṇā*）という術語で語り継がれ、大乘仏教徒たちの理想像である菩薩の衆生済度の意思（*cetanā*）と重ね合わされるようになる。このブツダの心である「大悲」も、仏道であれ菩薩道であれ、その道を実践する修行者の心である意思も、仏教教義の基本である五蘊説に拠る限り、同じ「行」（*saṃskāra*）、換言すると、「思」（*cetanā*）と呼ばれる心的作用である。何らかの認識や思考意識が働いているときは、必ず連動して作用する。しかしながら、「大悲」はブツダ固有の属性として性格付けられ、五位七十五法であれ、百法であれ、これらの「法」の中に「思」はあっても、「大悲」という心的要素は存在しない。この「大悲」について、大乘の初期経典（例えば、『八千頌般若経』『無量寿経』『十地経』）、アビダルマの論書（『阿毘達磨俱舍論』）、並びに、中観派の論書（『プラサンナパダー』）における理解の仕方・捉え方を検討してみたい。その際、五位七十五法であれ、百法であれ、玄奘の手になる『大乘百法明門論』の冒頭・末尾に述べられるが如くに、これらの諸法が、一切法無我、すなわち、人無我・法無我なる教説を修学すべき修行者たちにとっての分析結果であれば、我（*ātman*）と同様に、これら諸法の中に存在しない「大悲」を、果たして、修行者たちはどのようにして心に把握しようとしたのか、この点にも留意しながら考察を深めたいと思う。